

(仮称)日光茅ボッチの会 設立趣意書

採草地や茅場に代表される半自然草原は、草を刈り取って牛馬の飼料や茅葺き屋根の材料に利用するなどの目的で、放牧・火入れ・採草など、人の手が長期間にわたって加えられ、維持されてきた植物群落です。放置しておけば森林に推移する環境ですが、草原として維持されてきたことにより、希少種や絶滅危惧種を含む、数多くの種類の草原性植物や、それを食草とするチョウなどの草原性動物を育み、多様性に富んだ自然環境として残ってきました。また、刈り取った草を乾燥させるために作られてきた茅ボッチは、独特の美しい秋の里山景観を創り出してきました。

しかし、かつては全国各地にみられた半自然草原は、戦後の国民の生活様式の大きな変化や農山村の社会構造の変化などにより、全国的に急激に減少しており、現在では、「茅場」「茅野」などの地名に面影が残されているのみとなったところがほとんどです。

日光市土呂部の茅場もこの半自然草原の一つで、古くから土呂部の人々の大切な生活基盤として維持されてきました。そして、この茅場でも、春から秋にかけてたくさんの花が咲く美しい自然が残されてきました。また、秋に茅ボッチが立ち並ぶ景観は、美しい山村風景を代表するものとして多くの人々に親しまれ、「とちぎのふるさと田園風景百選」にも認定されています。

現在、土呂部に残る茅場は、栃木県内でまとまった面積を持つ、唯一の半自然草原です。県内では土呂部でしか見られない植物もあり、県レッドデータでも、多様性に富んだこの草原環境の保全が提唱されているほか、複数の研究者たちも、この茅場環境の保全の重要性を強く訴えています。また、環境省による、絶滅危惧植物の遺伝子保存のための種子採取対象地にもなっています。

土呂部の茅場の草は、冬期間の牛の飼料・敷き草として利用されてきました。しかし、昭和後期には 132 頭飼育されていた牛も、現在では 1 戸が 4 頭を飼育するのみとなりました。牛の飼育数の減少に伴って茅場を利用する必要性が低下したことなどから、昭和 30 年代に約 24ha あった広大な茅場が、現在では約 6ha を残すのみとなりました。

た。その茅場も、ほとんどが管理を放棄されたり、植林などにより森林化が進行して、消滅しようとしています。

もし、今後も草刈りを行わずこのまま放置しておく、森林化が進行し、多くの希少な草原性植物が絶えてしまうこととなります。また茅ボッチが立ち並ぶ美しい秋の景観も見られなくなってしまうます。

このような状況にある土呂部の茅場を保全し、未来に引き継いでいくためには、現在の状況を正確に把握し、できるだけ科学的に、かつ、現実的な保全方法を地元の方々とともに考え、実行していく必要があります。

私たちは、土呂部の方々が昔から行ってきたように茅場の草刈りを継承し、希少な植物を復活させたり、草原に自生する四季折々の美しい花や秋の茅ボッチのある風景を多くの方々に見てもらうなど、豊かな自然環境の復活と里山景観の保全を進めることが必要であると考えます。このため、今後、それらを推進していくための組織として、日光茅ボッチの会(仮称)を設立することといたしました。

同時に、これから保全していく茅場が、日光の新たな魅力ある資源となり、そこを訪れる人々との新たな交流が生まれることにより、土呂部地区、さらには栗山地域の活性化と振興につながることをめざし、活動を進めてまいります。

平成 25 年(2013 年)10 月 23 日

(仮称)日光茅ボッチの会

設立発起人 飯村孝文 (代表)

設立発起人 宮地信良

設立発起人 竹森 彰